

市浦村埋蔵文化財調査報告書 第14集

MITORI

実取(2)遺跡

～平成13年度市浦村特定環境保全公共下水道事業に伴う埋蔵文化財調査報告～



(掘文土器を伴った井戸跡)

平成14年3月

青森県市浦村教育委員会

序 文

本書は市浦村教育委員会が平成13年度に実施した実取(2)遺跡の発掘調査報告書であります。発掘調査を実施した市浦村相内の実取地区は、近年、ほ場整備事業が竣工され、農業の基盤整備が充実した美田が広がる田園地帯となっております。今回、その田園地帯に市浦村特定環境保全公共下水道事業に伴って実施された市浦村相内浄化センター建設中に平安時代の井戸跡1基が発見されました。

調査によって、北海道を中心に分布する榎文土器を伴った平安時代後期に相当する木組み井戸跡であることが明らかとなりました。また、平安時代の木枠を伴った井戸跡は県内では確認例が少なく、大変貴重な発見となりました。さらに井戸枠の中からは土物片・箸などの生活用具や種子など植物遺存体が多く出土しています。

これによって、十三湖周辺に暮らした平安時代の人々の生活様式や食生活の一端を明らかにできる貴重な資料となりました。本書が埋蔵文化財の保護と活用に関与するだけでなく、地域の歴史教材として利用していただければ、幸いと存じます。

また、調査に際しまして、御指導・御助言を頂きました諸先生方には心から感謝申し上げます。

平成14年3月

市浦村教育委員会

教育長 木村 義光

例 言

目 次

- 1 本書は青森県北津軽郡市浦村大字相内字実取423(市浦村相内浄化センター内)に所在する実取(2)遺跡の平成13年度発掘調査報告書である。
- 2 本書の執筆・編集は榊原滋高(市浦村教育委員会学芸員)が行い、遺物の復原・実測図の整理・製図、写真撮影は長利豪美(調査補助員)を中心に佐藤美矢子・丁子谷瑞穂・一戸勝子・伊藤美枝子・葛西節子・成田ヨシエ・今由果子・三和平作(地元作業員)で行った。
- 3 井戸枠の板材の年輪年代鑑定は光谷拓実氏(奈良国立文化財研究所)をお願いした。なお、現在分析途中であり、確実な測定結果が得られた段階で公表していただくことにした。
- 4 木製品の保存処理及び樹種同定・植物遺体類の同定は(株)吉田生物研究所に委託した。
- 5 本書を作成するに当たり、以下の方々から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上げる次第です(敬称略)。
村越 深、三浦圭介、斎藤 淳、高杉博章、工藤清泰、藤井誠二、齋沼邦彦
- 6 なお、記述等に誤りがあれば、すべて編者の責任である。

- 序 文
- 例 言
- 第I章 遺跡の立地と環境
- 第II章 調査の経緯と経過
- 第III章 調査の成果
- 第IV章 まとめ
- 付章 自然科学的分析調査の成果
- 1 市浦村実取(2)遺跡出土の木製品樹種同定調査結果
- 2 市浦村実取(2)遺跡出土植物遺体類の同定

第I章 遺跡の立地と環境

実取(2)遺跡は、青森県北津軽郡市浦村大字相内字実取423に所在する。市浦村は本州の最北端に近い青森県西北部に位置し、日本海と十三湖という潟湖(ラグーン)に面した自然豊かな村である。十三湖は白神山地や岩木山を源流とした岩木川の流れによって、肥沃な津軽平野を形成しながら、日本海へと注ぎ出す河口にできた潟湖である。このため、十三湖一帯の地域は岩木川を通じて結ばれる河川交通の要衝としてだけでなく、津軽海峡を越えた北海道との日本海交易の接点として縄文時代以来、人や物資のさまざまな交流が行われた地域であり、たくさんの遺跡が残されている。

本遺跡はその十三湖北岸の沖積低地に立地する。十三湖北岸には、板割山(標高178m)、四ツ滝山(標高670m)、木無岳(標高587m)といった峰々からなる中山山地とそれから派生した市浦台地が発達している。相内川・唐川・碓松川といった主要河川はこうした中山山地の山々から発達したもので、碓松川は直接日本海へ流れ込み、唐川は五月女蕨原の砂帯を經由して、十三湖北岸に流れ着く。また、相内川はこれらの河川の中で最も大きく、太田川・桂川・山王川が相内集落付近で合流したもので、十三湖北岸に流入し、沖積地

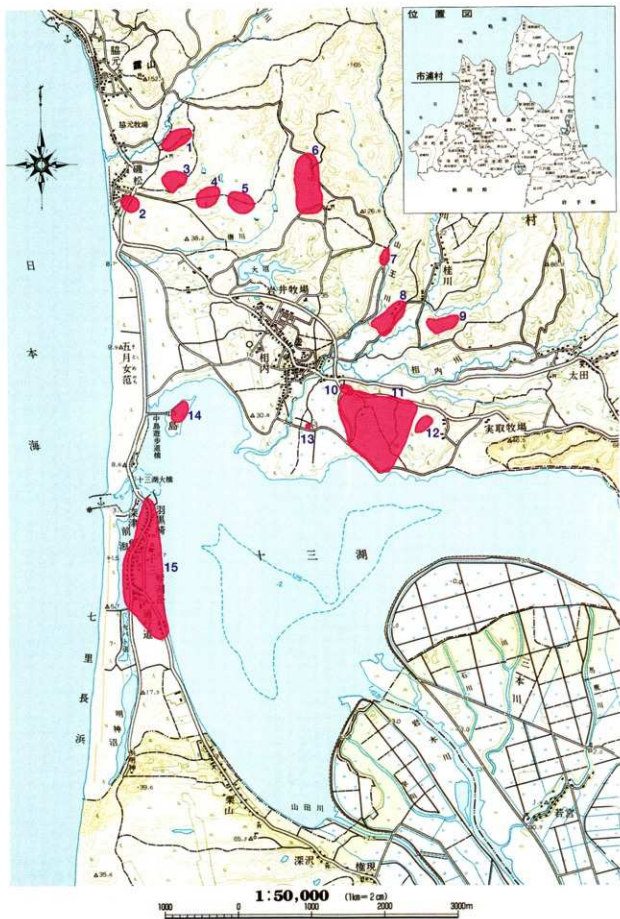


第1図 中山山地・平館山地概観図(青森県史 自然編 地学より)

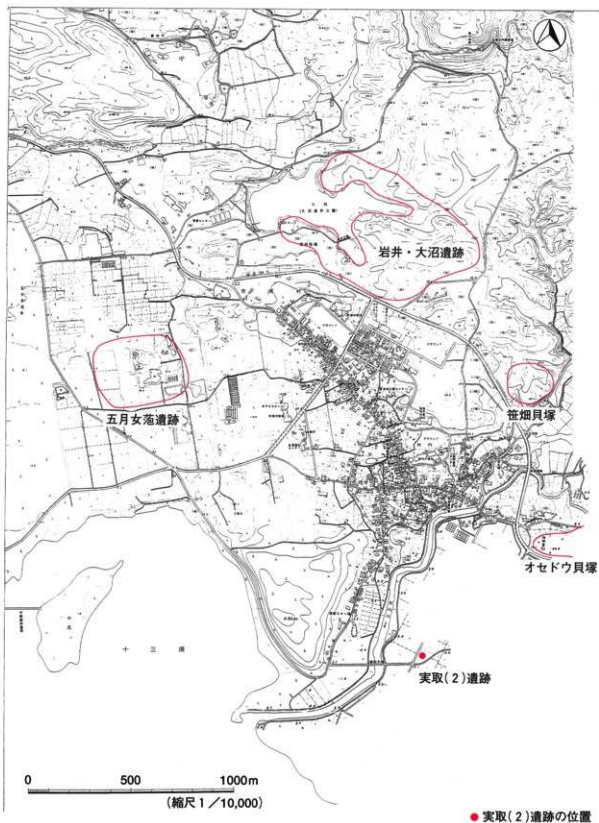
を形成している。本遺跡はその相内川が十三湖北岸に流れ出す河口部から約800m遡った標高2.7m程の場所に位置しており、相内川によって形成された沖積低地の自然堤防上に立地していたものと推測される。一帯はかつて腰まで浸かる低湿地帯であったものが、人々の努力によって、長い年月をかけて開墾され、現在では、ほ場整備によって区画整理された立派な田園地帯となっている。

第1表 市浦村・十三湖周辺の古代・中世遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 時代 | 種別 | 番号 | 遺跡名 | 時代 | 種別 |
|----|---------|----------|-----------------|----|---------|-----------|------------------|
| 1 | 古館遺跡 | 平安・中世 | 館跡(防衛性集落), 中世城館 | 9 | ナガレ山遺跡 | 平安 | 集落, 或いは館跡(防衛性集落) |
| 2 | 碓松砂山遺跡 | 平安・中世・近世 | 散布地 | 10 | オセドウ貝塚 | 縄文前・中世・中世 | 集落, 或いは館跡(防衛性集落) |
| 3 | 唐川(3)遺跡 | 平安 | 散布地 | 11 | 福島城跡 | 平安・中世 | 館跡(防衛性集落), 中世館跡 |
| 4 | 唐川(1)遺跡 | 平安 | 散布地 | 12 | 実取(1)遺跡 | 平安 | 散布地 |
| 5 | 唐川(2)遺跡 | 平安 | 散布地 | 13 | 実取(2)遺跡 | 平安 | 集落 |
| 6 | 唐川城跡 | 平安・中世 | 館跡(防衛性集落), 中世城館 | 14 | 中島遺跡 | 奈良 | 散布地 |
| 7 | 山王坊遺跡 | 中世 | 宗教遺跡 | 15 | 十三海遺跡 | 中世・近世 | 中世・近世の港湾 |
| 8 | 赤坂遺跡 | 平安 | 集落 | | | | |



第2図 市浦村・十三湖周辺の古代・中世遺跡



第3図 実取(2)遺跡と周辺の縄文遺跡

第Ⅱ章 調査の経緯と経過

平成13年6月25日の夕刻、市浦村建設課から市浦村教育委員会へ工事中に遺跡が発見されたと連絡が入った。遺跡は市浦村特定環境保全公共下水道事業に伴って実施された市浦村相内浄化センター建設中に発見されたものであった。

翌日早朝には遺跡の発見現場にて、工事関係者、市浦村建設課、市浦村教育委員会の三者で遺跡の取扱いについて協議を行った。現況は浄化センター管理棟の建設基礎工事によって、すでに地表面から約2mほども深く掘削されていた。工事現場のほぼ中央付近、標高1mほどの場所から縦板材を円形に並べた井戸跡と思われる遺構が認められた(写真14)。また、工事関係者によって、井戸跡から採取された横走沈線に伴った擦文土器を実見することができた。出土した擦文土器の年代から推して、平安時代後期(10世紀後半～11世紀)の井戸跡と判断することができた。工事現場の上層を観察すると、地表面から約1m下は、すでに旧地形はなく、開墾に伴う水田耕作土が堆積している(写真3)。この遺跡一带は相内川によって形成された沖積地・低湿地にあたり、現況は一帯がすべて水田となっている。このことから低湿地に所在する平安時代後期(10世紀後半～11世紀)の集落遺跡であったと推測された。しかし、



1. 実取(2)遺跡と福島城跡の位置 1955年米軍撮影(国土地理院蔵)

前述したように、すでに一帯は開墾によって、遺跡が大きく消失してしまったものと判断されたが、今回のように検出された井戸跡は地下深く残存していたため、井戸枠の下部だけが残されていたようである。

そこで、協議の結果、市浦村教育委員会が早急に発掘調査することで合意し、工事作業を一端中止してもらうことになった。遺構は井戸跡1基だけであったので、発掘作業はその日のうちに無事終了することができた。なお、翌日には青森県教育庁文化財保護課に今回の経緯を報告し、埋蔵文化財包蔵地として遺跡発見届けの手続きを行った。

調査の結果、井戸枠内から擦土土器片が50点ほど、曲物片や箸などの木製品、植物の種子等の植物遺存体が多く見つかっている。また、平安時代の木杵を伴った井戸跡は青森県内では確認例も少なく、大変貴重なものであることが明らかとなった。

そこで、青森県教育庁文化財保護課と市浦村教育委員会、工事主体者である五所川原土木事務所の3者で協議した結果、調査報告書を刊行して記録保存を図ることとなった。

そして、市浦村教育委員会は、五所川原土木事務所と平成14年1月24日付け五土木第1137号で正式に委託契約を締結し、平成14年3月25日までに報告書を作成することとなった。



2. 実取(2)遺跡と福島城跡の位置 1998年7月14日撮影

第三章 調査の成果

基本層序について

本遺跡の基本層序は計3ヶ所の任意の地点で確認した。まず、管理棟建設による基礎工事を行っていた範囲の南壁で1ヶ所（No1地点）、そして井戸跡検出地点の南壁で1ヶ所（No2地点）、さらに浄化センター管理棟の基礎杭設置によって、最も深く掘削されていた1ヶ所（No3地点）である。なお、No1～No3地点の順に標高が低くなっていく。ここでは、遺跡に堆積する基本土層を示しておきたい。

No.1 地点の土層

1・2層は、にぶい黄褐色や黒褐色混じりの粘土層（旧水田耕作土）が堆積する。標高2.7m～1.7mまで約1m堆積している。3・4層は、黒褐色や灰色の粘土層が堆積する。粘土粒子は非常に細かく、湿性が強く、自然堆積の繰り返しによって、硬質になっている。標高1.7m～0.5mまで約1.2mの堆積が確認できた。長い間、低湿地帯であった様子が明らかである。



3. No.1 地点の土層（北から）

No.2 地点の土層

井戸枠周辺の堆積土層である。

1～5層は灰オリーブ色や灰色の粘土層が堆積する。標高1.2m～0.6mまでの約0.6mの堆積を確認することができた。やはり、低湿地帯の特徴を良く表しており、粘土粒子は非常に細かくて湿性も強く、自然堆積を繰り返している。6層は暗緑灰色のシルト層であり、粗粒（径1mm～2mm）の砂礫が含まれるようになる。また、7層では暗オリーブ色の砂質土になり、完全に粗粒の砂礫になる。標高0.6m辺りでは河川の氾濫によって運ばれた土砂が堆積している。



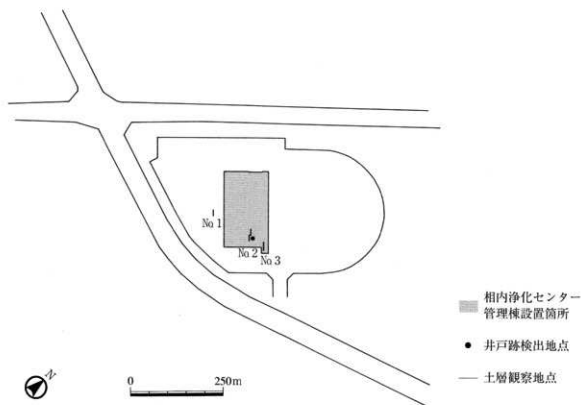
4. No.2 地点の土層（北から）

No.3 地点の土層

管理棟の基礎杭工事によって、最も深く掘削された堆積土層である。標高0.4m～-0.4mに当たる。1層は灰オリーブ色の砂質土層で、径5mm～1cmの粗粒の砂礫を多量に含んでいる。2～7層は灰（暗）オリーブ色の砂質土層である。径1mm～2mmの砂礫層で、自然木や種子等の植物遺存体を多量に含む堆積土である。或いは旧河床だったと推され、河川（相内川）の氾濫によって運ばれた土砂とともに、遺跡周辺に生えていた樹木が流されて堆積したと思われる。これは周辺の森林植生を直接示す貴重なものと考えられる。8層は緑灰色の砂質土層で、やはり粗粒砂が堆積している。

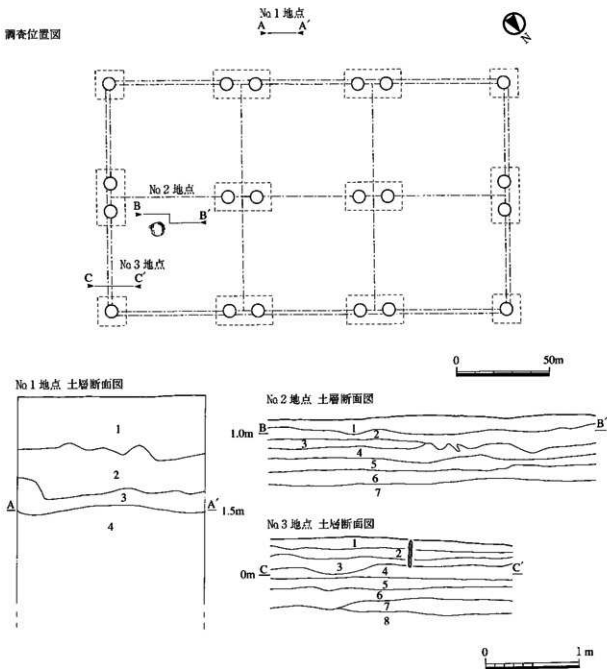


5. No.3 地点の土層（北から）



第4図 調査位置図と土層観察地点

調査位置図



第5図 調査位置と土層断面図

第2表 調査区土層観察表

| No 1地点 土層 | | | | | |
|-----------|--------------|---------|-------|----|----------------------------|
| 1 | 100R24Hに染み貫通 | 粘土 | ハート | アリ | 日本産新粘土 |
| 2 | 100R31H貫通 | 粘土 | ハート | アリ | |
| 3 | 2.5V32粘貫通 | 粘土 | ハート | アリ | |
| 4 | 100Y41貫通 | 粘土 | ハート | アリ | |
| No 2地点 土層 | | | | | |
| 1 | 5V32粘オリーブ色 | 粘土 | ハート | アリ | 均質な細粒新土層 |
| 2 | 7.5V2粘オリーブ色 | 粘土 | ハート | アリ | |
| 3 | 5V42粘オリーブ色 | 粘土 | ややソフト | アリ | |
| 4 | 7.5V41粘色 | 粘土 | ややソフト | アリ | |
| 5 | 7.5V31粘色 | 粘土 | ややソフト | アリ | |
| 6 | 7.50V41粘貫通 | 粘土(ソフト) | ややソフト | アリ | 第1-2層の粗粒砂層に含む |
| 7 | 5V42粘オリーブ色 | 粘質土 | ソフト | アリ | 第1-2層の粗粒砂層を含む |
| No 3地点 土層 | | | | | |
| 1 | 5V32粘オリーブ色 | 粘質土 | ハート | アリ | 厚5mm-1cmの粗粒砂層を、粘物質を含む多数に混入 |
| 2 | 5V42粘オリーブ色 | 粘質土 | ハート | アリ | 第1-2層の粗粒砂層を、粘物質を含む多数に混入 |
| 3 | 5V32粘オリーブ色 | 粘質土 | ハート | アリ | |
| 4 | 7.5V32粘オリーブ色 | 粘質土 | ソフト | アリ | |
| 5 | 5V32粘オリーブ色 | 粘質土 | ややソフト | アリ | |
| 6 | 5V42粘オリーブ色 | 粘質土 | ソフト | アリ | |
| 7 | 5V32粘オリーブ色 | 粘質土 | ソフト | アリ | |
| 8 | 100Y31粘貫通 | 粘質土 | ソフト | アリ | |



6. 調査前風景 (西から)



7. 調査風景 (東から)



8. 調査風景 (南東から)



9. 調査風景 (東から)



10. No 1 地点の土層 (北から)



11. No 3 地点の土層 (北東から)



12. 井戸跡と周辺の調査 (東から)



13. No 3 地点の土層 (植物遺存体層) (東から)

検出遺構について

<SE01井戸>

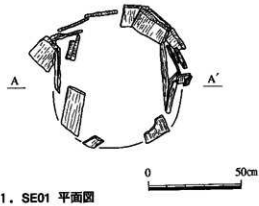
縦板材を円形に組み合わせた木組み井戸である。確認された縦板材は全部で23点であった。一部、腐食によるものか、或いは重機による破壊の影響なのだろうか縦板材が見られない箇所があり、実際にはもう少し多くの縦板材が使用されていたものと推される。

縦板材は水分の多い粘質土中に埋まっていたために保存状態も良好であった。縦板材は引き割りされたような薄い桎目板（横木取り）を使用し、下部先端を尖らせて加工していた。縦板材の規模は、後述するようにさまざまな大きさのものがあ、規格化された板材製品と呼べるものではなかった。

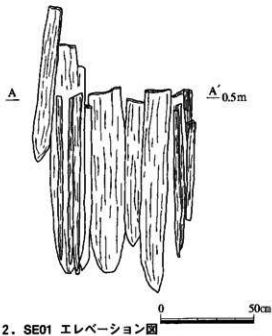
井戸跡周辺はすでに重機による掘削によって、井戸上部の掘り込み面は確認することが出来ず、実際の生活面がどの高さであったかも明らかにできなかった。

また、井戸の掘り方（井戸プラン）も確認することができず、上部から縦板材を杭状に打ち込んだ可能性も十分に考えられる。ちなみに円形に並べられた縦板材のプランは直径約0.7m程であった。

井戸枠内の覆土は植物遺存体を多く含む茶褐色の泥炭層が見られ、腐植のために悪臭を放っていた。出土遺物はすべて井戸枠内覆土の底辺から、土壌サンプルと共に採取した。出土遺物には擦文土器50点余り（特に細片が多い。）のほか、曲物片、箸、加工木などの木製品や植物の種子・自然木などの植物遺存体が大量に出土しており、廃棄行為を行ったものと考えられる。



1. SE01 平面図



2. SE01 エレベーション図

第6図 SE01 井戸



14. SE01 調査前状況（北東から）



15. SE01 調査風景（東から）



16. SE01 検出（北東から）



17. SE01 埋土除去（北東から）



18. SE01 調査風景（北東から）



19. SE01 埋土の植物遺存体



20. SE01 完掘（北東から）



21. SE01 縦板材の接写（北東から）

出土遺物について

出土遺物には木組み井戸に伴う縦板材と井戸枠内から出土した擦文土器や木製品のほか、植物遺存体がある。以下、個別に述べる。

<擦文土器> (1~9)

今回の調査によって検出された井戸跡SE01から、北海道を主要な分布圏とする擦文土器が出土した。井戸跡という確実な遺構に伴った例として、大変貴重なものとなろう。

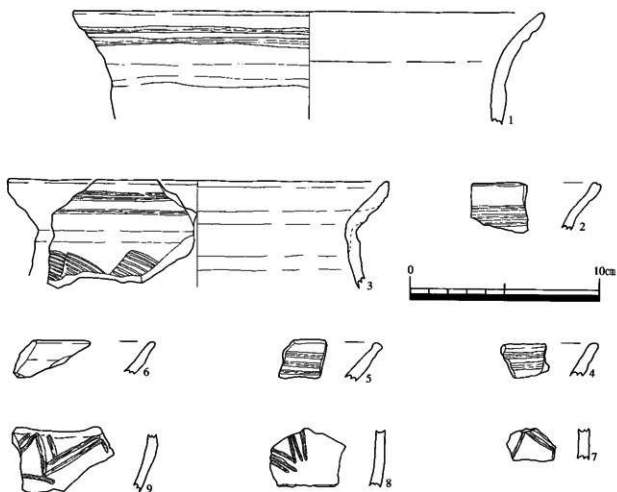
出土した土器は細片も含めて約50点余りで、以下で示すように器形や胎土、成形・調整技法、文様等から、確実に土師器と判断できるものではなく、すべて擦文土器の範疇で捉えられるものばかりである。しかし、小破片が多く、全体の形状を知り得るものがない。そのため、ここでは厳密な分類を行うことはできないが、器形はほとんどが甕形と思われる。また、口縁部の形状から少なくとも4個体分が存在したものと考えられる。ここでは、図化することができた破片資料の詳細について述べる。

なお、(1)・(2)は工事中の井戸跡発見に伴って、工事関係者の手によって採取されたものである。厳密には対象外とすべきものかもしれない。しかし、周辺には井戸跡以外には遺構はなく、さらに工事関係者の言によれば、井戸跡から出土したものに間違いはないということなので、ここでは井戸跡から出土したものととして、掲載することとした。

(1) 口縁部は外反し、外面に横走沈線文を施す。推定口径が25cmで、口縁部の器壁厚6~7mmのやや大ぶりの甕形土器である。口唇部はやや丸みを持つ。横走沈線文は4条確認できる。上位の2条は施文具の先端を強く引きずって、明瞭に沈線文が作り出されている。一方、下位の2条は施文具を横にして、撫でるように施されているので、沈線文が明瞭でない。そのため、口縁部~頸部の段は、かろうじて痕跡として残されているだけである。内面は横方向の丁寧なミガキ調整が施されている。胎土は細砂粒を多く含むが、焼成は堅緻で良好である。色調は黄褐色を呈する。

(2) 口縁部は外反し、外面に横走沈線文を施す。破片が小さく、口径を推定することができないが、口縁部の器壁は4~5mmと薄く、小型品の甕形土器であろう。口唇部はやや角張り、その中央には1条の細い沈線文が施されている。口縁部の横走沈線文は3条が確認できるが、施文具を横にして撫でるように施されているので、沈線文が明瞭でない。口縁部~頸部の段もほとんど残されていない。内面は横方向の丁寧なミガキ調整が施されている。胎土は細砂粒を多く含むが、焼成は堅緻で良好である。色調は黒褐色を呈する。

(3) 口縁部は外反し、口唇部に近づくに従って内湾気味に立ち上がる。外面に横走沈線文を施す。推定口径が20cmで、口縁部の器壁厚は5~6mmで、中型の甕形土器であろう。口唇部は両端を強く押さえることによって、先端が尖っている。口縁部の横走沈線文は3条確認できる。それぞれ施文具の先端を強く引きずって、明瞭に沈線文が作り出されている。口縁部~頸部の段は、比較的明瞭に残されている。外面胴上部には斜め方向の刷毛目痕が見られる。内面は横方向の丁寧なミガキ調整が施されている。胎土は細砂粒を多く含むが、焼成は堅緻で良好である。色調は暗褐色を呈する。



第7図 SE01出土 捺文土器

第3表 SE01出土遺物

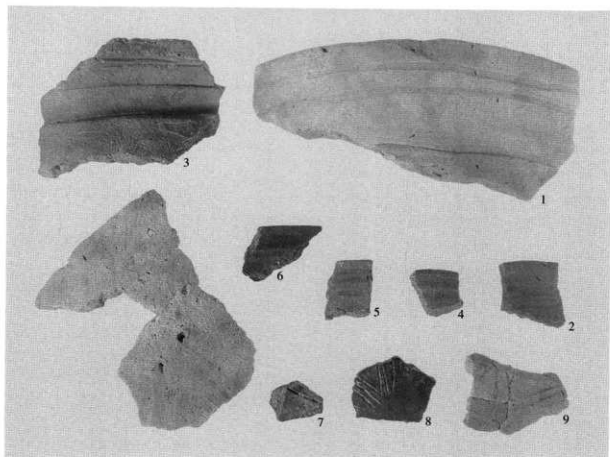
| 番号 | 種類 | 器種 | 法量 | 文 様 | 変 形 | 焼成 | 胎 土 | 色 調 | 備 考 |
|----|------|----|-----------|-------------------------------|---------------------------------|----|----------|-----|-----|
| 1 | 捺文土器 | 甕 | 口径 (25cm) | 口縁部に4条の沈線文。ただし、下段2条の沈線は不明瞭。 | 外面：口縁部横ナデ。内面：横ヘラミガキ | 良好 | 砂粒含むが、堅緻 | 黄褐色 | |
| 2 | 捺文土器 | 甕 | | 口縁部に3条の沈線文。ただし、全体に不明瞭。口唇部に沈線。 | 外面：口縁部横ナデ。内面：横ヘラミガキ | 良好 | 堅緻 | 黒褐色 | |
| 3 | 捺文土器 | 甕 | 口径 (20cm) | 口縁部に3条の沈線文を確認。 | 外面：口縁部横ナデ。胴部に斜めのハナメ調整。内面：横ヘラミガキ | 良好 | 砂粒含むが、堅緻 | 暗褐色 | |
| 4 | 捺文土器 | 甕 | | 口縁部に2条の沈線文を確認。 | 内外面：横ナデ。 | 良好 | 砂粒含むが、堅緻 | 暗褐色 | |
| 5 | 捺文土器 | 甕 | | 口縁部に3条の沈線文を確認。 | 内外面：横ナデ。 | 良好 | 砂粒含むが、堅緻 | 暗褐色 | |
| 6 | 捺文土器 | 甕 | | 無文 | 内外面：横ナデ。 | 良好 | 砂粒含むが、堅緻 | 黒褐色 | |
| 7 | 捺文土器 | 甕 | | 胴部に鋸歯状文 (或いは山形文) | 内外面：横ナデ。 | 良好 | 砂粒含むが、堅緻 | 黒褐色 | |
| 8 | 捺文土器 | 甕 | | 胴部に鋸歯状文 (或いは山形文) | 内外面：横ナデ。 | 良好 | 砂粒含むが、堅緻 | 黒褐色 | |
| 9 | 捺文土器 | 甕 | | 胴部に鋸歯状文 (或いは山形文) | 内外面：横ナデ。 | 良好 | 砂粒含むが、堅緻 | 暗褐色 | |

(4) 口縁部はやや外反し、外面に横走沈線文を施す。破片が小さく、全体の形状を把握することができないが、甕形土器であろう。口縁部の器壁厚は5～6mmである。口唇部はやや丸みを持つ。口縁部の横走沈線文は2条が確認できるが、施文具を横にして撫でるように施されているので、沈線文が明瞭でない。胎土は細砂粒を多く含むが、焼成は堅緻で良好である。色調は暗褐色を呈する。

(5) 口縁部はやや外反し、外面に横走沈線文を施す。破片が小さく、全体の形状を把握することができないが、やはり甕形土器であろう。口縁部の器壁厚は5～6mmである。口唇部は角張っている。口縁部の横走沈線文は3条が確認できる。しかし、施文具を横にして撫でるように施されているので、沈線文が明瞭でない。胎土は細砂粒を多く含むが、焼成は堅緻で良好である。色調は暗褐色を呈する。

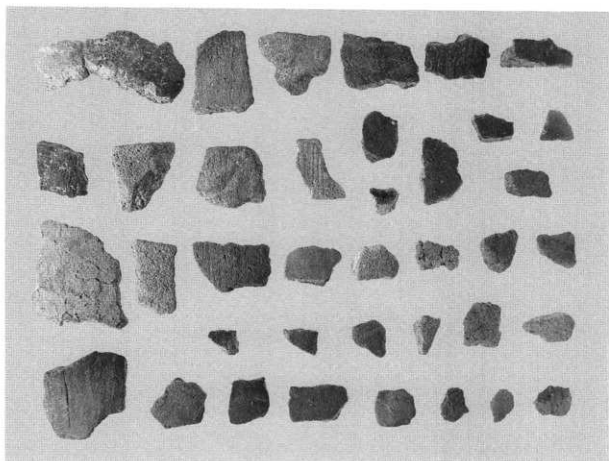
(6) 口縁部はやや外反する。口縁部に文様は特に見られない。破片が小さく、全体の形状を把握することができないが、やはり甕形土器であろう。口縁部の器壁厚は4～5mmである。口唇部はやや丸みを持つ。胎土は細砂粒を多く含むが、焼成は堅緻で良好である。色調は黒褐色を呈する。

(7)・(8)・(9) 体部破片である。先端が鋭利な施文具によって、鋸歯状文或いは山形文と推される刻線が施されている。胎土は細砂粒を多く含むが、焼成は堅緻で良好である。色調は7・8が黒褐色、9は暗褐色を呈する。



22. SE01出土遺物① 擦文土器

(写真中の番号は第7図番号と対応する。)



23. SE01出土遺物② 擦文土器

<木製品> (10~44)

木組み井戸に伴う縦板材や井戸枠から出土した木製品について紹介する。なお、個々の詳細については観察表を参照していただきたい。

(10) ~ (32) 縦板材である。ほとんどすべて柃目板（横木取り）を使用している。それぞれの縦板材の上部はすでに欠損しており、元の長さを把握することはできない。縦板材の規模は残存長55.9~122.2cm、幅4.3~18.2cm、厚さ0.4~2.9cmの範囲で、さまざまな大きさのものが含まれている。特に規格化された製品（板材）ではないと思われる。

(11) のように釘穴と推される方形の孔が認められており、一部、転用材が使用されていることは明らかである。

また、縦板材の先端は埋め込みやすいように、鋭利な加工痕が良く残っている。縦板材先端の加工方法は第8図で示したように、〔端部の加工方法〕と〔面の加工方法〕の大きく2種類の違いがある。さらに〔端部の加工方法〕には、①両端を削り落として鋭利にするものと②片側一端を削り落として鋭利にするものの2種類に細分できる。

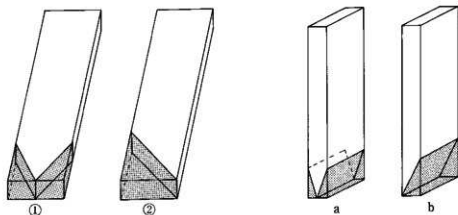
同様に〔面の加工方法〕にもa：両面を削って鋭利にするものとb：片面を削って鋭利にするものの2種類に細分できる。このように、縦板材の加工・面取り調整はそれぞれ4種類の組み合わせによって、加工方法が異なる（観察表参照）。

(33) ~ (36) 曲物の残片である。

(37) ~ (40) 箸状木製品である。

(41) ~ (44) 加工木である。自然木の先端を削って、鋭利にしている。杭として利用されたのであろう。

<縦板材先端加工の模式図>

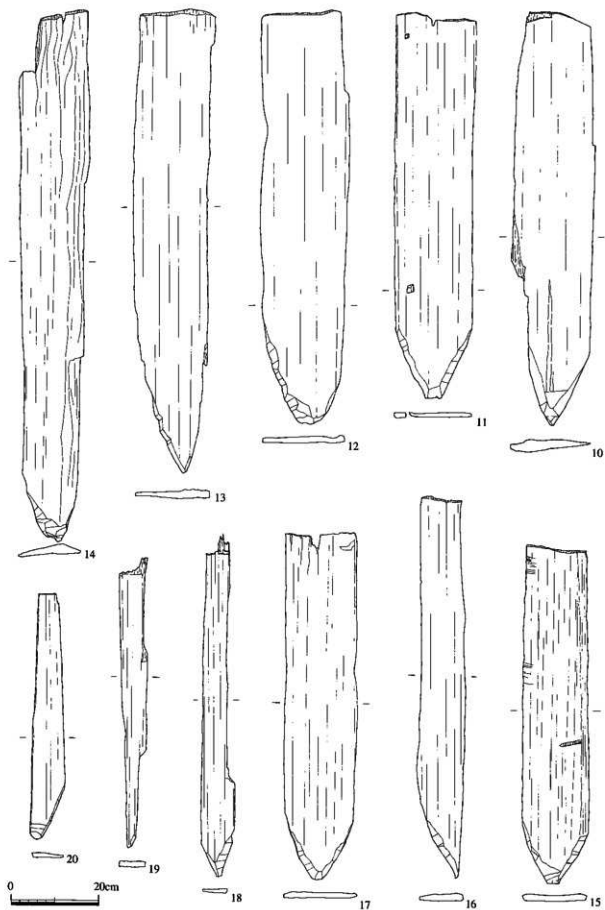


<縦板材先端の加工方法>

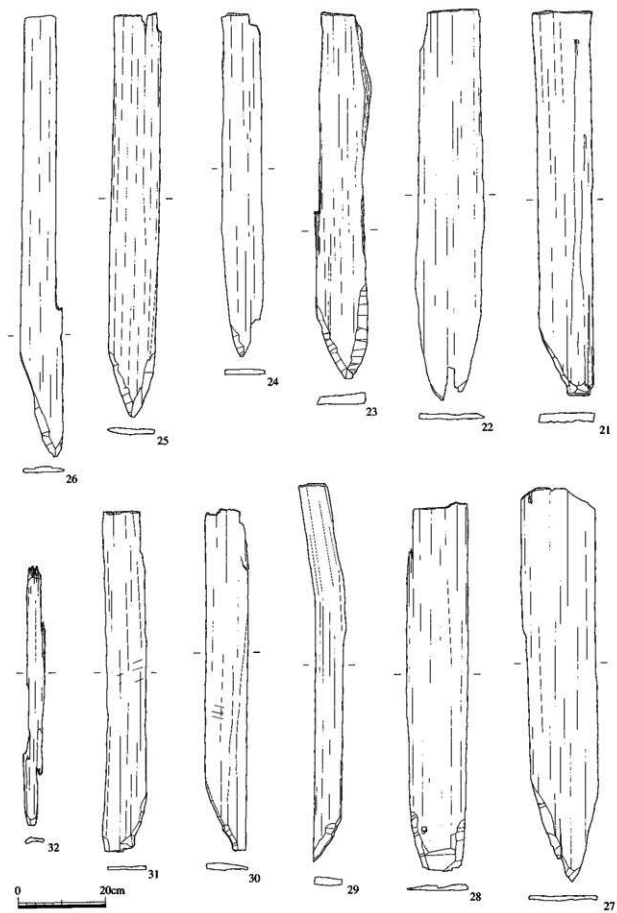
〔端部の加工方法〕 ①両端を削り落として鋭利にするもの。
②片側一端を削り落として鋭利にするもの。

〔面の加工方法〕 a：両面を削って鋭利にするもの。
b：片面を削って鋭利にするもの。

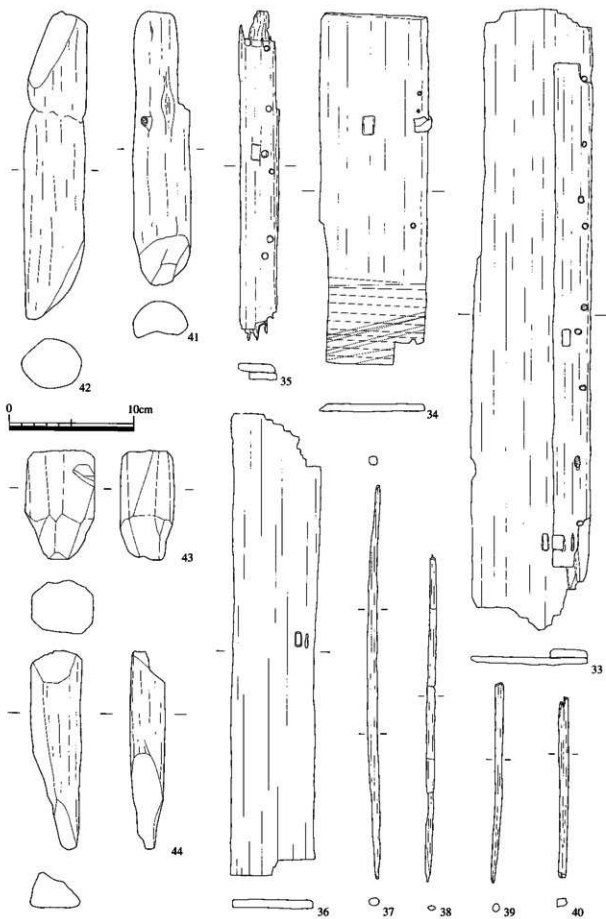
第8図 縦板材先端の加工方法と模式図



第9図 SE01出土 木製品①



第10図 SE01出土 木製品②



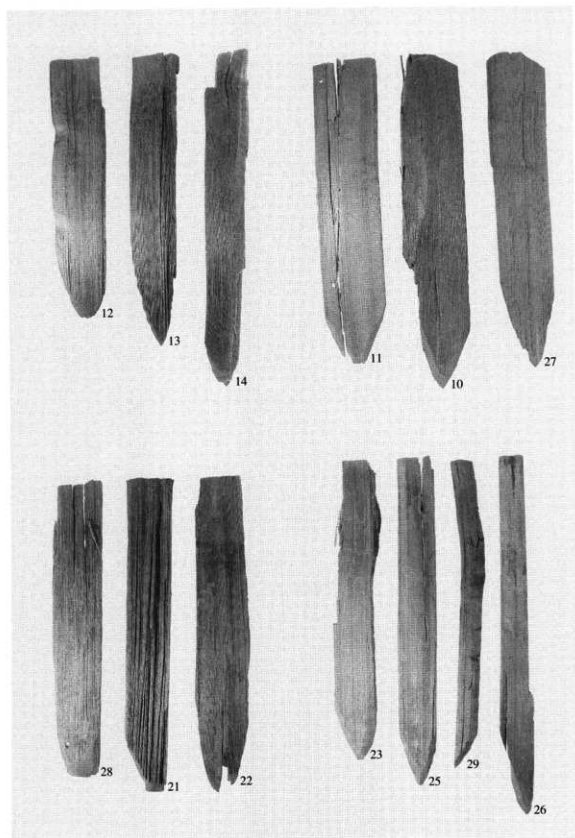
第11図 SE01出土 木製品③

第4表 SE01出土遺物 木製品計測表(1)

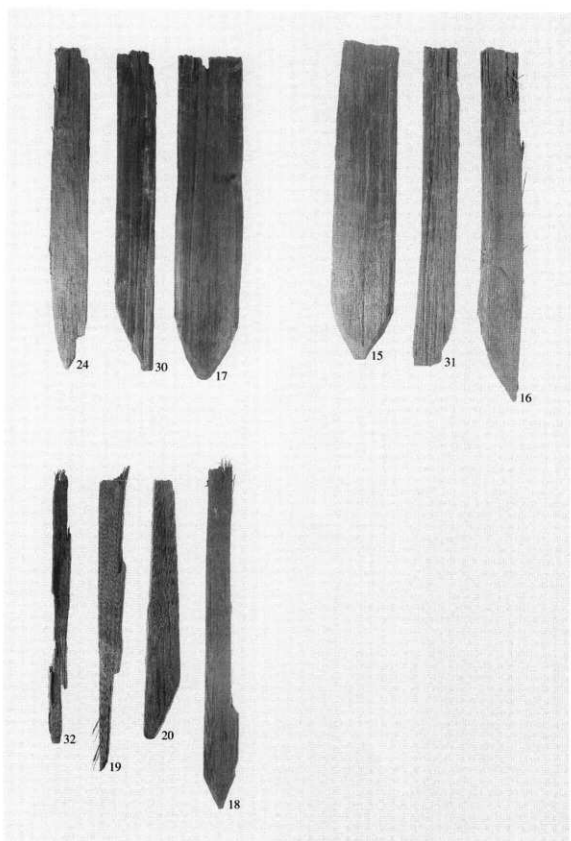
| 番号 | 種類 | 法量 (cm) | 材 質 | 縦板分類 | 特 徴 | 木取り | 整理番号 |
|----|----|------------------------------------|---------------------|------|-------------------------------------|-----|------|
| 10 | 縦板 | 長さ 95.0 幅 18.2 厚 0.5~2.9 | ヒノキ科 アスナロ属 | ①-a | 中位から下位にかけて、片側が欠損している。 | 板目板 | No15 |
| 11 | 縦板 | 長さ 88.6 幅 17.7 厚 1.0 | ヒノキ科 クロベ属 クロベ | ①-b | 上位と下位に方形の穿孔がある。 先端部が欠損している。板用材か。 | 板目板 | No16 |
| 12 | 縦板 | 長さ 95.1 幅 18.9 厚 1.0~1.5 | ヒノキ科 アスナロ属 | ①-a | 先端部は丸みをもたせ、失らせている。 | 板目板 | No22 |
| 13 | 縦板 | 長さ 106.3 幅 16.9 厚 0.7~2.0 | ヒノキ科 クロベ属 クロベ | ①-a | | 板目板 | No12 |
| 14 | 縦板 | 長さ 122.2 幅 14~15.8 厚 0.5~2.4 | ヒノキ科 アスナロ属 | ①-a | | 板目板 | No20 |
| 15 | 縦板 | 長さ 77.9 幅 14.7 厚 1.5 | | ①-a | 先端部が欠損している。 | 板目板 | No14 |
| 16 | 縦板 | 長さ 87.2 幅 10.0 厚 0.5~1.6 | | ②-b | | 板目板 | No17 |
| 17 | 縦板 | 長さ 79.5 幅 16.8 厚 1.3 | | ①-a | | 板目板 | No13 |
| 18 | 縦板 | 長さ 78.2 幅 7.6 厚 0.6~1.1 | | ①-b | 上位から下位にかけて、片側が欠損している。 | 板目板 | No3 |
| 19 | 縦板 | 長さ 66.4 幅 6.0 厚 1.2 | ヒノキ科 クロベ属 クロベ | a | 両面が欠損している。 | 板目板 | No7 |
| 20 | 縦板 | 長さ 55.9 幅 7.8 厚 0.4~1.1 | ヒノキ科 アスナロ属 | ①-a | 片側が欠損している。 | 板目板 | No6 |
| 21 | 縦板 | 長さ 88.8 幅 12.4 厚 2.0 | | ②-b | 先端部が欠損している。 | 板目板 | No11 |
| 22 | 縦板 | 長さ 90.0 幅 15.0 厚 0.4~1.2 | | ①-a | | 板目板 | No19 |
| 23 | 縦板 | 長さ 84.6 幅 11.2 厚 1.7~2.4 | | ①-a | | 板目板 | No1 |
| 24 | 縦板 | 長さ 79.1 幅 9.1 厚 1.1 | ヒノキ科 クロベ属 クロベ | ①-b | 先端部の片側が欠損している。 | 板目板 | No18 |
| 25 | 縦板 | 長さ 93.0 幅 10.6 厚 0.5~1.4 | ヒノキ科 アスナロ属 | ①-a | | 板目板 | No5 |
| 26 | 縦板 | 長さ 100.9 幅 9.2 厚 0.5~1.3 | | ①-b | | 板目板 | No2 |
| 27 | 縦板 | 長さ 89.9 幅 15.7 厚 0.6~1.1 | | ①-a | | 板目板 | No21 |

第5表 SE01出土遺物 木製品計測表(2)

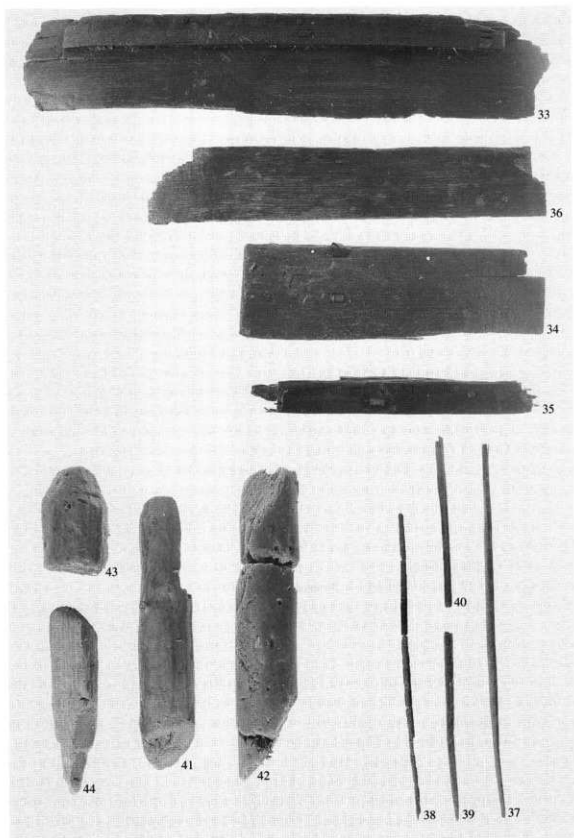
| 番号 | 種類 | 法量 (cm) | 材 質 | 縦板分類 | 特 徴 | 木取り | 整理番号 |
|----|-----|--------------------------------|---------------------|------|--|-----|------|
| 28 | 縦板 | 長さ 84.5 幅 14.0 厚 0.5~1.4 | ヒノキ科 アスナロ属 | ①-a | 下位に方形の穿孔がある。 先端部が欠損している。 | 椀目板 | No4 |
| 29 | 縦板 | 長さ 86.7 幅 6.2 厚 1.2~1.8 | | ②-b | | 椀目板 | No10 |
| 30 | 縦板 | 長さ 78.0 幅 9.5 厚 0.6~1.6 | | ②-b | 先端部が欠損している。 | 椀目板 | No9 |
| 31 | 縦板 | 長さ 78.2 幅 8.8 厚 0.8 | ヒノキ科 クロベ属 クロベ | ②-b | 先端部が欠損している。 | 椀目板 | No8 |
| 32 | 縦板 | 長さ 59.6 幅 4.3 厚 0.8 | ヒノキ科 アスナロ属 | b | 先端部の片割を削って、尖らせている。 両面が著しく欠損している。 | — | No23 |
| 33 | 曲物 | 長さ 49.9 幅 9.4 厚 0.5 | | | 曲物の破片である。板皮で2ヶ所を閉じている。 釘孔が9ヶ所あり、その内の7ヶ所を木釘で留めている。 | 椀目板 | |
| 34 | 曲物 | 長さ 28.2 幅 8.6 厚 0.6 | | | 曲物の破片である。板皮が付着している。 釘孔が3ヶ所ある。椎痕が多数ある。 | 椀目板 | |
| 35 | 曲物 | 長さ 37.1 幅 7.0 厚 0.5 | | | 曲物の破片である。板皮で1ヶ所閉じている。 釘孔が7ヶ所あり、その内の5ヶ所を木釘で留めている。 | 椀目板 | |
| 36 | 曲物 | 長さ 26.6 幅 2.9 厚 0.6 | | | 曲物の破片である。 とじる板皮が付着している。 | 椀目板 | |
| 37 | 箸 | 長さ 31.7 径 0.3~0.8 | | | 両端を削って、鋭利にしている。 | | |
| 38 | 箸 | 長さ 26.3 径 0.3~0.6 | ヒノキ科 クロベ属 クロベ | | 端を削って、鋭利にしている。 欠損品である。 | | |
| 39 | 箸 | 長さ 16.2 径 0.3~0.7 | | | 端を削って、鋭利にしている。 欠損品である。 | | |
| 40 | 箸 | 長さ 14.5 径 0.6~0.8 | | | 両端が欠損している。 | | |
| 41 | 加工木 | 長さ 22.2 径 4.3 | カエデ科 カエデ属 | | 自然木の端を削って、鋭利にしている。 欠損品である。 | | |
| 42 | 加工木 | 長さ 25.0 径 4.0~4.9 | シナノキ科 シナノキ属 | | 自然木の端を削って、鋭利にしている。 欠損品である。 | | |
| 43 | 加工木 | 長さ 8.8 径 3.9~5.0 | ヤナギ科 ヤナギ属 | | 自然木の端を削って、鋭利にしている。 欠損品である。 | | |
| 44 | 加工木 | 長さ 15.8 径 2.8~4.0 | ヒノキ科 クロベ属 クロベ | | 自然木の端を削って、鋭利にしている。 欠損品である。 | | |



24. SE01出土 木製品（縦板材）写真①



25. SE01出土 木製品（縦板材）写真②



26. SE01出土 木製品(曲物片・箸・加工木)写真③

第IV章 ま と め

今回の発掘調査によって、擦文土器を伴する木組み井戸跡が発見された。ここでは、擦文土器の特徴と編年の位置づけを中心に述べて、まとめとしたい。

SE01井戸跡から出土した擦文土器は破片も小さく、全体の形状を知り得ることはできないが、およそ次のような特徴を挙げることができる。

まず、すべて甕形と思われること。甕の文様は、口縁部と胴部（恐らく胴部上半）に施されている。口縁部の文様には、2～4条の横走沈線文を施すものと口縁部が無文のものがある。口縁部に横走沈線文を有するものは不明瞭な沈線を施したものが多く、沈線がすでに形態化している。また、口縁部～頸部の段もかろうじて残されているような印象が強い。そして、口縁部の形態には頸部から緩やかに外反するものと、頸部から「く」の字状に外反するものがある。また、口唇部は丸くおさまるものや角張るタイプのものがある。後者には口唇部に沈線を巡らすものもある。胴部の文様ははっきりしないが、鋸歯状文や山形文といった刻線文様が見られる。以上のような擦文土器の特徴を挙げることができる。

ここで、本州北部から見た擦文土器の年代的な位置づけを積極的に提示している三浦圭介氏による青森県の古代土器編年（三浦1990・1991）に当てはめてみると、上記に挙げた擦文土器の特徴から、擦文土器の後期或いは終末に近い段階、年代的には10世紀中葉～11世紀代に相当するものと思われる。しかし、擦文土器の終末年代については、特に北海道の研究者との間で意見の大きな隔たりがあって決着を見ていないが、青森県内においては、11世紀末～12世紀初頭にはすでに中世的土器様相へと転換する時期としており、擦文土器の終末もその頃に位置付けられている（三浦1990・1991）。

また、SE01井戸跡に使用されていた縦板材は年輪年代測定を行うことができる良好な資料となっている。現在、分析途中ということもあって確実な測定結果が得られれば、伐採された板材の絶対年代が得られることになるであろう。そうなれば、実年代を遺構や遺物の年代決定に利用することが可能となるものと考えられる。

さて、実取(2)遺跡が機能していた時期には、東北部地域において丘陵端部に土壘や堀を巡らして集落を囲郭する防御性集落（環濠集落）が登場している。

十三湖の北岸、標高160mの所に位置する市浦村唐川城跡が平成11年～13年に発掘調査が実施された結果、古代の高地性防御集落であることが明らかとなり、実取(2)遺跡と類似する擦文土器が多く出土している（富山大学人文学部考古学研究室2001）。

また、こうした防御性集落（環濠集落）が登場する動きと並行して、河川流域の低湿地帯に集落を形成する動きが展開するようになる。特に岩木川流域の低地帯には、近年多くの集落跡が見つかっており、従来の土師器や須恵器のほかに擦文土器を伴った遺跡が多い特徴を持っている。実取(2)遺跡はまさにこうした低地集落の1つと考えられる。

SE01井戸跡から出土した植物遺体の同定結果によると、イネも検出されている。

擦文土器の影響を受けた人々が、稲作農耕を生業の基本に岩木川流域の低湿地帯を本格的に開発する段階が始まったのである。

《引用・参考文献》

- 青森県教育委員会 1977 『石上神社遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会埋蔵文化財報告書第35集
- 青森県史編さん
自然部会 2001 『青森県史 自然編 地学』
- 菊地徹夫 1984 『北方考古学の研究』六興出版
- 斎藤 淳 1999 『青森県の擦文土器』『平成11年度冬の企画展』 中里町立博物館
- 櫻井清彦・菊池徹夫 1987 『蓬田大館遺跡』早稲田大学文学部考古学研究室報告 六興出版
- 富山大学人文学部
考古学研究 2001 『青森県市浦村唐川城跡発掘調査現地説明会資料』
- 三浦圭介 1990 『日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相』『シンポジウム土器からみた中世社会の成立』
- 三浦圭介 1991 『本州の擦文文化』『月刊 考古学ジャーナル』No341 12月号
- 三浦圭介 1994 古代東北地方北部の生業にみる地域差』『北日本の考古学』吉川弘文館
- 南北海道考古学
情報交換会誌 1995 『シンポジウム 渡島半島の擦文文化』『北海道考古学情報』第6号
- 横山英介 1990 『擦文文化』考古学ライブラリー59 ニューサイエンス社

付章 自然科学的分析調査の成果

市浦村・実取(2)遺跡出土木製品の樹種同定調査結果

(株)吉田生物研究所 汐見 真

1. 試料

試料は市浦村・実取(2)遺跡から出土した食器具1点, 容器4点, 建築材22点, 用途不明品7点の合計34点である。

2. 観察方法

剃刀で木口(横断面), 柾目(放射断面), 板目(接線断面)の各切片を採取し, 永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果(針葉樹2種, 広葉樹5種)の表と顕微鏡写真を示し, 以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujaopsis* sp.)

(遺物No 1~3, 5, 6, 8~15, 18, 19, 21~23, 25~28)

(写真No 1~3, 5, 6, 8~15, 18, 19, 21~23, 25~28)

木口では仮道管を持ち, 早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からヤスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ, アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州, 四国, 九州に分布する。

2) ヒノキ科クロベ属クロベ (*Thuja standishii* Carr.)

(遺物No 4, 7, 16, 17, 20, 29)

(写真No 4, 7, 16, 17, 20, 29)

木口では仮道管を持ち, 早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に偏って接線状に存在する。柾目では放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に2~6個ある。放射柔細胞の水平壁が接線壁と接する際に水平壁は山形に厚くなり, 接線壁との間に溝のような構造(インデンチャー)ができ, よく発達しているのが認められる。板目では放射組織は全て単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。クロベは本州, 四国に分布する。

3) ヤナギ科ヤナギ属 (*Salix* sp.)

(遺物No32)

(写真No32)

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管 ($\sim 110\mu\text{m}$) が単独または2～4個放射方向ないし斜線方向に複合して分布する。軸方向柔組織は年輪界で顕著。柾目では道管は単穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、篩状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ $\sim 450\mu\text{m}$ であった。ヤナギ属はバッコヤナギ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

4) クルミ科クルミ属オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. Sieboldiana Kitamura)

(遺物No35-1)

(写真No35-1)

散孔材である。木口では比較的大型の道管 ($\sim 350\mu\text{m}$) が散在し、晩材部で径を減じる傾向にある。軸方向柔細胞は周囲状、および1細胞幅の接線状あるいは網状柔組織である。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ $\sim 600\mu\text{m}$ であった。オニグルミは北海道、本州、四国、九州に分布する。

5) カエデ科カエデ属 (*Acer* sp.)

(遺物No30)

(写真No30)

散孔材である。木口ではやや小さい道管 ($\sim 100\mu\text{m}$) が単独ないし数個複合して分布する。軸方向柔細胞は年輪界で顕著である。木繊維の壁に厚薄があり木口面で濃淡模様が出る。柾目では道管は単穿孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ $\sim 1\text{mm}$ からなる。カエデ属はウリカエデ、イタヤカエデ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

6) シナノキ科シナノキ属 (*Tilia* sp.)

(遺物No31)

(写真No31)

散孔材である。木口ではやや小さい道管 ($\sim 120\mu\text{m}$) が単独ないし数個複合して多数分布する。軸方向柔組織は短接線状と、年輪界に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性である。道管放射組織間壁孔は小さい。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ $\sim 2\text{mm}$ となっている。道管、軸方向柔細胞、木繊維は階層状になっている。シナノキ属は、シナノキ、ヘラノキ、オオバボダイジュなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

7) ミカン科サンショウ属サンショウ? (*Zanthoxylum piperitum* DC.)

(遺物No34, 35-2)

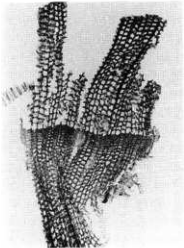
(写真No34, 35-2)

散孔材である。単独ないし、ときに数個複合した道管が極めて疎らに分布している。軸方向柔細胞は年輪界に1~2列と道管の周囲に1列に配列する。柾目では道管は単穿孔を有する。道管放射組織間壁孔は小型で多い。放射組織は全て平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1~2細胞列、高さ~500 μ m以下からなる。

市浦村実取(2)遺跡出土木製品樹種同定表

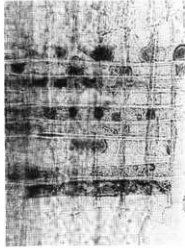
| No | 品名 | 樹種 | | |
|------|---------|------------------|-----------------|---------|
| 1 | 縦板(27) | ヒノキ科アスナロ属 | 井戸枠の建築部材 | |
| 2 | 縦板(32) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 3 | 縦板(12) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 4 | 縦板(11) | ヒノキ科クロベ属クロベ | | |
| 5 | 縦板(16) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 6 | 縦板(22) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 7 | 縦板(24) | ヒノキ科クロベ属クロベ | | |
| 8 | 縦板(14) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 9 | 縦板(25) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 10 | 縦板(28) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 11 | 縦板(18) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 12 | 縦板(26) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 13 | 縦板(23) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 14 | 縦板(29) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 15 | 縦板(20) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 16 | 縦板(19) | ヒノキ科クロベ属クロベ | | |
| 17 | 縦板(31) | ヒノキ科クロベ属クロベ | | |
| 18 | 縦板(30) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 19 | 縦板(21) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 20 | 縦板(13) | ヒノキ科クロベ属クロベ | | |
| 21 | 縦板(17) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 22 | 縦板(15) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 23 | 縦板(10) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 25 | 曲物(33) | ヒノキ科アスナロ属 | | 井戸枠内の出土 |
| 26 | 曲物(34) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 27 | 曲物(35) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 28 | 曲物(36) | ヒノキ科アスナロ属 | | |
| 29 | 箸(38) | ヒノキ科クロベ属クロベ | | |
| 30 | 加工木(41) | カエデ科カエデ属 | | |
| 31 | 加工木(42) | シナノキ科シナノキ属 | | |
| 32 | 加工木(43) | ヤナギ科ヤナギ属 | | |
| 33 | 加工木(44) | ヒノキ科クロベ属クロベ | 旧河床跡の出土(図版写真なし) | |
| 34 | 自然木 | ミカン科サンショウ属サンショウ? | | |
| 35-1 | 自然木 | クルミ科クルミ属オニグルミ | | |
| 35-2 | 自然木 | ミカン科サンショウ属サンショウ? | | |

※品名のカッコ()内の番号は図版番号に対応する。

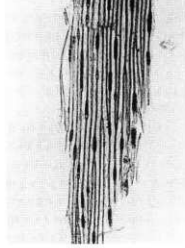


木口×40

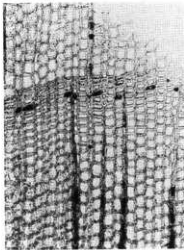
No-1 ヒノキ科アスナロ属



柁目×200

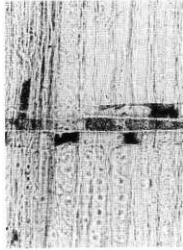


板目×40



木口×100

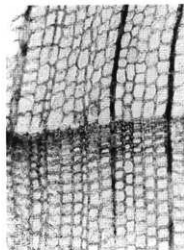
No-2 ヒノキ科アスナロ属



柁目×200

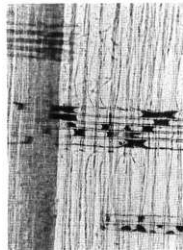


板目×100

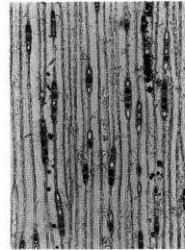


木口×100

No-3 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

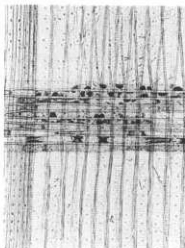


板目×100

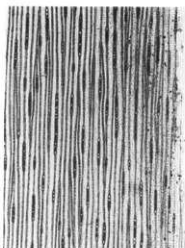


木口×40

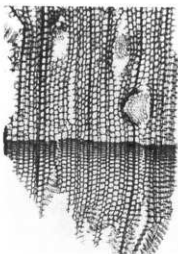
No-4 ヒノキ科クロベ属クロベ



柁目×100

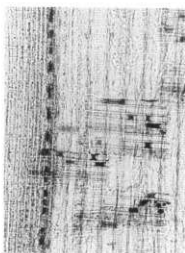


板目×40

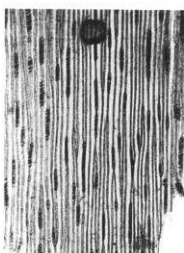


木口×40

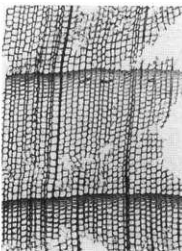
No-5 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

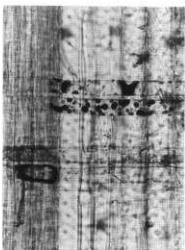


板目×40

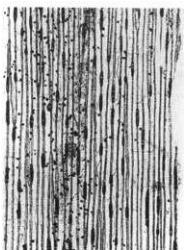


木口×40

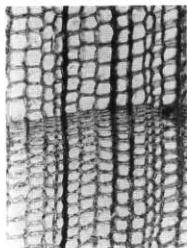
No-6 ヒノキ科アスナロ属



柁目×200

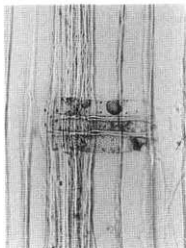


板目×40

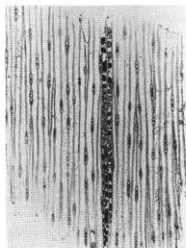


木口×100

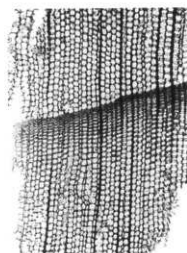
No-7 ヒノキ科クロベ属クロベ



柁目×200

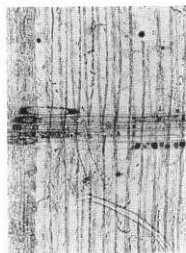


板目×40

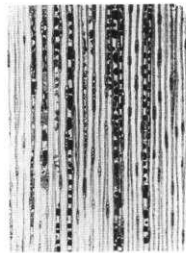


木口×40

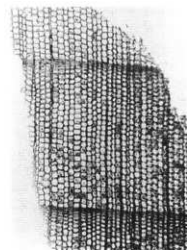
No-8 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

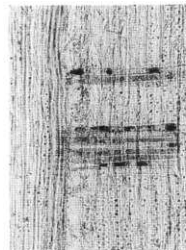


板目×40

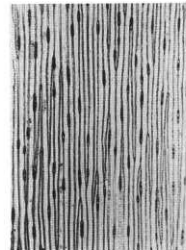


木口×40

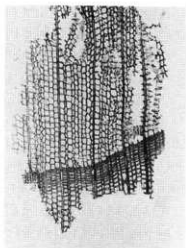
No-9 ヒノキ科アスナロ属



柁目×200

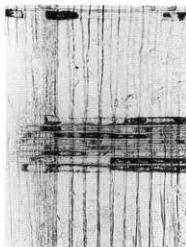


板目×40

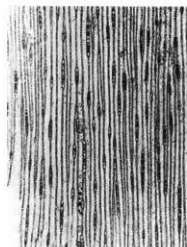


木口×40

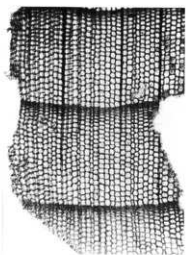
No-10 ヒノキ科クロベ属クロベ



柁目×100

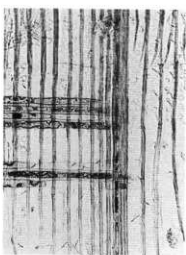


板目×40

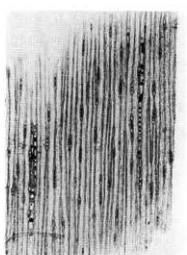


木口×40

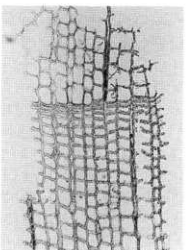
No-11 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

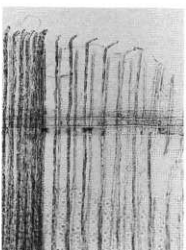


板目×40

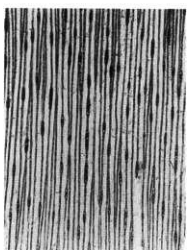


木口×100

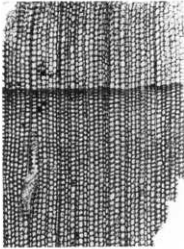
No-12 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

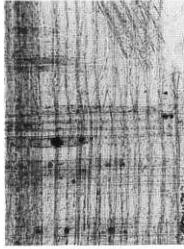


板目×40

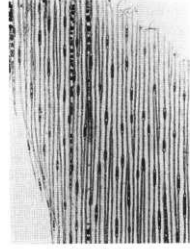


木口×40

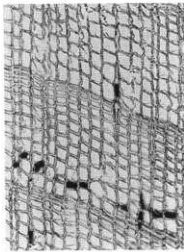
No-13 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

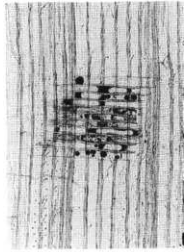


板目×40

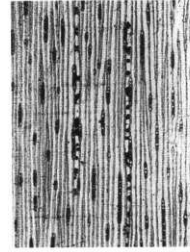


木口×100

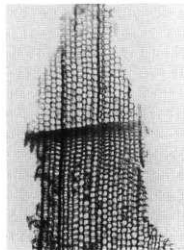
No-14 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

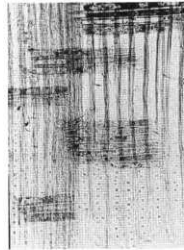


板目×40

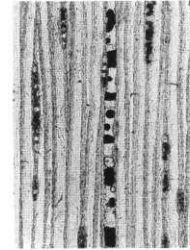


木口×40

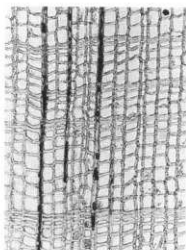
No-15 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

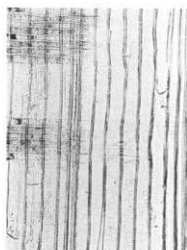


板目×100

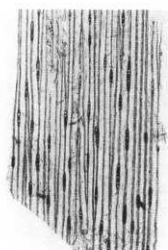


木口×100

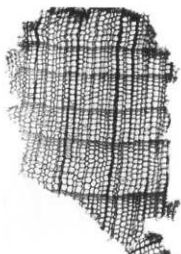
No. 16 ヒノキ科クロベ属クロベ



柁目×100

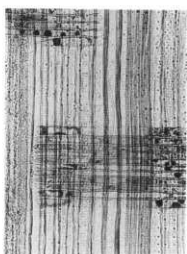


板目×40

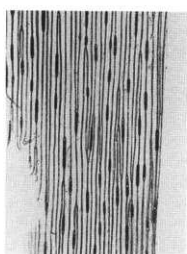


木口×40

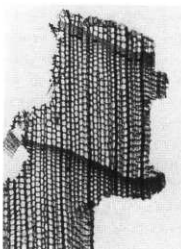
No. 17 ヒノキ科クロベ属クロベ



柁目×100

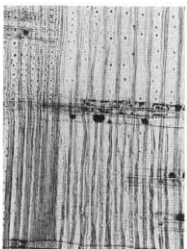


板目×40

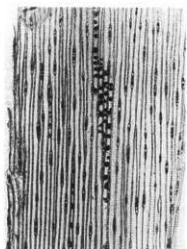


木口×40

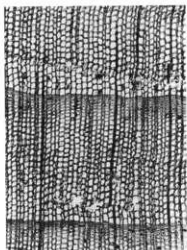
No. 18 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

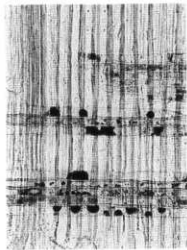


板目×40

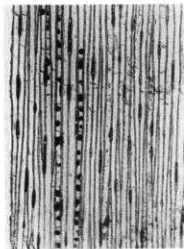


木口×40

No-19 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

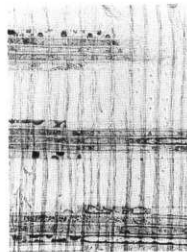


板目×40

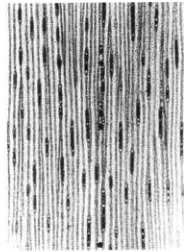


木口×40

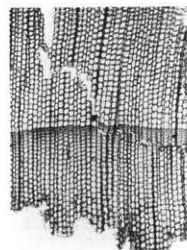
No-20 ヒノキ科クロベ属クロベ



柁目×100

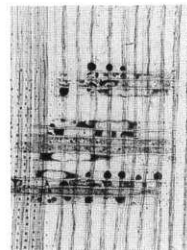


板目×40

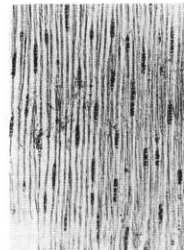


木口×40

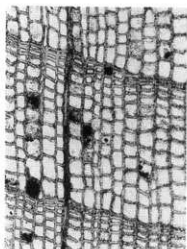
No-21 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

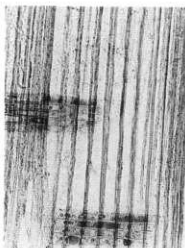


板目×40

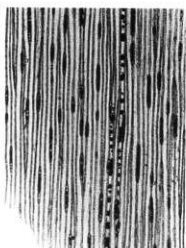


木口×100

No-22 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

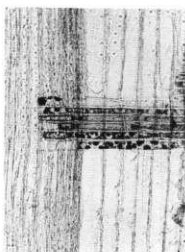


板目×40

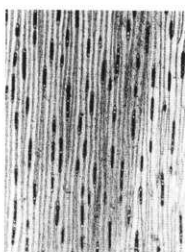


木口×40

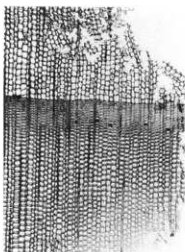
No-23 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

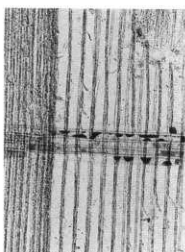


板目×40

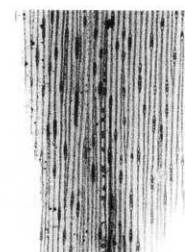


木口×40

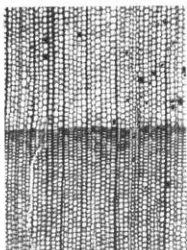
No-25 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

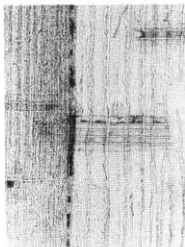


板目×40

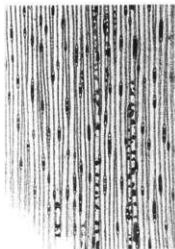


木口×40

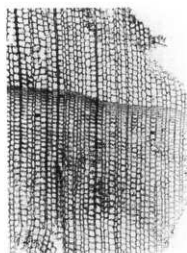
No-26 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

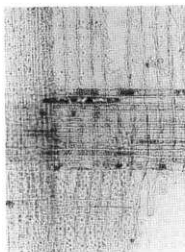


板目×40

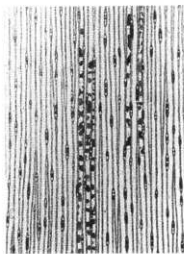


木口×40

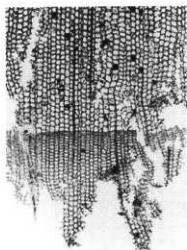
No-27 ヒノキ科アスナロ属



柁目×100

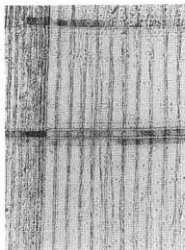


板目×40

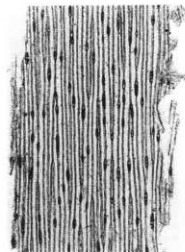


木口×40

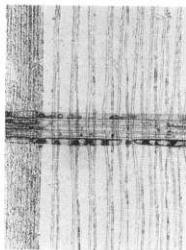
No-28 ヒノキ科アスナロ属



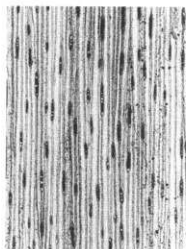
柁目×100



板目×40

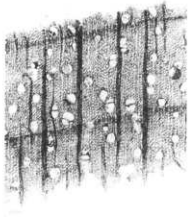


柱目×100



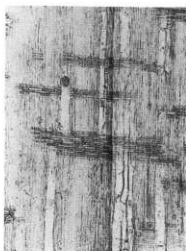
板目×40

No-29 ヒノキ科クロベ属クロベ

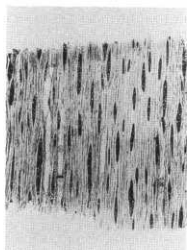


木口×40

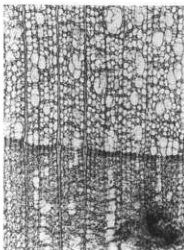
No-30 カエデ科カエデ属



柱目×40

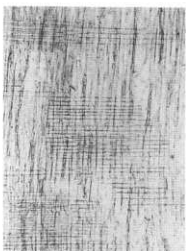


板目×40

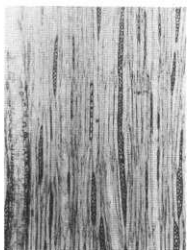


木口×40

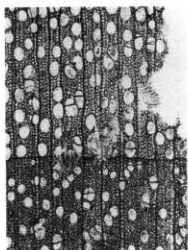
No-31 シナノキ科シナノキ属



柱目×40

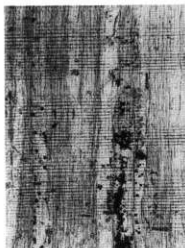


板目×40



木口×40

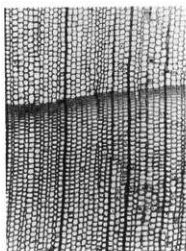
No-32 ヤナギ科ヤナギ属



柱目×40

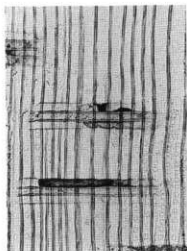


板目×40

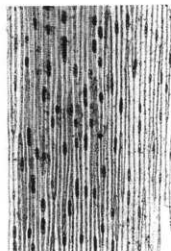


木口×40

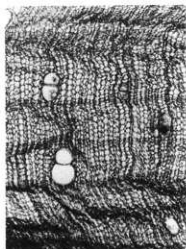
No-33 ヒノキ科クロベ属クロベ



柱目×100

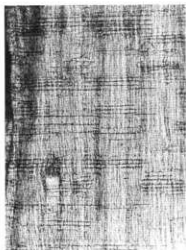


板目×40

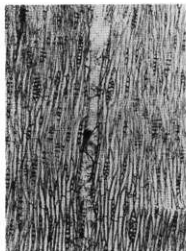


木口×40

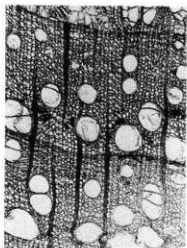
No-34 ミカン科サンショウ属サンショウ?



柱目×40



板目×40



木口×40

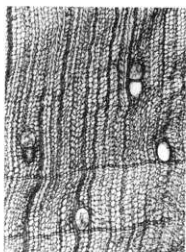


柱目×40

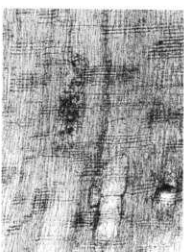


板目×40

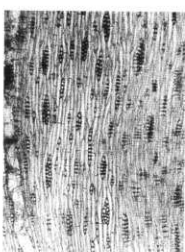
No-35-1 クルミ科クルミ属オニグルミ



木口×40



柱目×40



板目×40

No-35-2 ミカン科サンショウ属サンショウ?

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)
- 島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 (1982)
- 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所 (1999)
- 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社 (1979)
- 深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 (1997)

◆使用顕微鏡◆

Nikon
MICROFLEX UFX-DX Type 115

市浦村・実取(2)遺跡出土植物遺体類の同定

(株)吉田生物研究所 本 吉 恵理子
京都造形芸術大学 岡 田 文 男

青森県市浦村に所在する実取(2)遺跡から出土した種実類の同定結果を以下に報告する。

1. 調査した試料

調査したのは、旧河床跡と井戸内から出土した、水洗済みで水漬け状態の種実類ならびに動物遺体である。そのほかに木片や炭化材、曲物のとじ皮、広葉樹樹皮が出土した。

2. 調査方法

種実類を実体顕微鏡下で観察して、その形状、表面の紋様から種の同定を行った。同定に際しては、石川(1994年)、中山・井之口・南谷(2000年)を参照した。学名は基本的に北村・村田(1964年)、岡(1979年)に掲げ、記述の順番は牧野(1990年)に拠った。

3. 観察結果

同定できたのは植物(木本4種、草本3種)7種(表1、2)と動物1種(表3)で、出土遺構ごとに各種の写真を示し、観察所見を記す。

表1 旧河床出土の植物遺体

| No | 和名 | 科名 | 学名 | 木本/草本 | 部位 | 食用 | 出土数 | 写真No |
|----|-------|-----|--|-------|----|----|--------------|------|
| 1 | オニグルミ | クルミ | <i>Juglans mandshurica</i> <i>Maxim. subsp. Sieboldiana</i> | 木本 | 核 | ○ | 3 | 1 |
| 2 | ブナ属 | ブナ | <i>Fagus sp.</i> | 木本 | 総苞 | ○ | 13+ α | 2 |

表2 井戸内出土の植物遺体

| No | 和名 | 科名 | 学名 | 木本/草本 | 部位 | 食用 | 出土数 | 写真No |
|----|------------------|------|--|-------|-----------|----|----------------|------|
| 1 | オニグルミ | クルミ | <i>Juglans mandshurica</i> <i>Maxim. subsp. Sieboldiana</i> | 木本 | 核 | ○ | 1.5+ α | 3 |
| 2 | ブナ属 | ブナ | <i>Fagus sp.</i> | 木本 | 総苞 | ○ | 2 | 4 |
| 3 | トチノキ | トチノキ | <i>Aesculus turbinata</i> Blume | 木本 | 果実/ 種子 | ○ | 果実: 5 種子: 7 | 5, 6 |
| 4 | ブドウ属 | ブドウ | <i>Vitis sp.</i> | 木本 | 果実/ 種子 | ○ | 果実: 3 種子: 3 | 7, 8 |
| 5 | ヒヨウタン属 | ウリ | <i>Lagenaria sp.</i> | 草本 | 果皮 | ○ | 1 | 9 |
| 6 | イネ | イネ | <i>Oryza sativa</i> L. | 草本 | 穎 | ○ | 17 | 10 |
| 7 | エノコログサ属 orヒエ属 | イネ | <i>Setaria sp. Or Echinochloa</i> <i>sp.</i> | 草本 | 穎 | ○ | 1 | 11 |
| 8 | 不明 | — | — | 木本 | 種子 | ? | 1 | 12 |

表3 井戸内出土の動物遺体

| No | 和名 | 科名 | 学名 | 部位 | 食用 | 写真No |
|----|-------|----|----|------|----|------|
| 1 | 淡水産巻貝 | — | — | 殻口の蓋 | ○ | 14 |

1) オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *Sieboldiana*) の核 (写真No 1, 3)

旧河床からは大きさ(縦×横) 2.5×2.3~2.7×2.3cmの完形, 半裁された核が出土した。井戸枠内からは大きさ2.2×2.3~3.3×2.9cm, 半裁された核と核の破片が出土した。ほぼ円形を呈し, 先は尖る。表面に縦方向の溝が走る。旧河床から出土した1個の核には, ネズミないしリスによる食害が見られる。

2) ブナ属 (*Fagus* sp.) の総苞 (写真No 2, 4)

旧河床からは大きさ2.6×1.8cmの四裂して完全に開いた総苞と, 開きかけたもの, 総苞片が出土した。井戸枠内からは大きさ2.0×1.2cm, 完形の四裂していない総苞とその破片が出土した。四裂して開いた総苞は平面形がX字形で, 四裂していない総苞は紡錘形を呈する。やや密に鋭い突起が表面を覆う。ブナ属にはブナとイヌブナがある。

3) トチノキ (*Aesculus turbinate* Blume) の果実 (写真No 5) と種子 (写真No 6)

1.4×1.5~3.0×3.2cmの球形や倒卵球形の果実と, 1.2×1.5~2.9×3.5cmの横長球形の種子が出土した。ともに完熟のものと小型で未熟のものがある。果実には完形のもの, 三裂した状態の果皮がある。種子の表面には光沢があり, 下半部にはおおきなへそがみられる。

4) ブドウ属 (*Vitis* sp.) の果実 (写真No 7) と種子 (写真No 8)

4.5×3.5mmの楕円形を呈する黒色の果実(幼果?)と, 5.0×4.5mm厚さ3.0mm広倒卵形で先が尖る種子が出土した。この種子の背面は丸みがあり, 楕円形の凹みがある。腹面中央には溝状の正中線が走り, その両側に長楕円形の凹みがある。

5) ヒョウタン属 (*Lagenaria siceraria* sp.) の果皮 (写真No 9)

2.7×1.8cmのヒョウタン属の果皮片が出土した。表面は内外面ともに平滑ではなく, 外面には凹凸があり網目状に凸線が走る。

6) イネ (*Oryza sativa* L.) の穎 (写真No10)

7.0×3.5mmの長楕円形の穎が出土した。

7) エノコログサ属 (*Setaria* sp.) ないしヒエ属 (*Echinochloa* sp.) の穎 (写真No11)

2.5×3.5mmの広楕円形の穎が出土した。

8) 不明種子 (写真No12)

5.5×4.0mmの長楕円形, 先端が尖る種子が出土した。片面が破損し, 約1/2が残存する。茶褐色で表面はやや光沢があり, 厚みがある。木本の種子である。

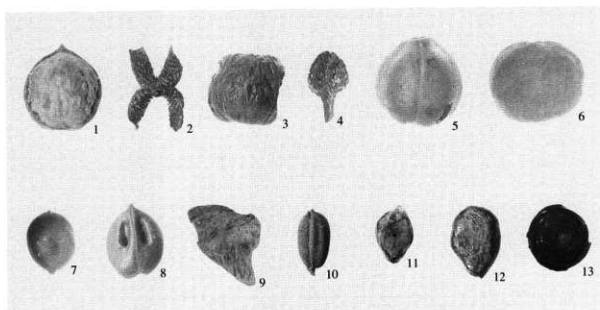
9) 淡水産巻貝の殻口 (写真No13)

直径1.05cmの円盤状を呈する, 淡水産巻貝の殻口の蓋が出土した。片面はこげ茶色で, もう片面には同心円状の縞模様が見られる。

以上の結果のとおり、旧河床、井戸内ともに食物残渣の植物遺体の出土が多かった。
 一般に井戸内の堆積土には食用植物の残渣が含まれることが多い。

【参考文献】

- 石川茂雄（1994年）『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会
 北村四郎・村田 源（1979年）『原色日本植物図鑑 木本編』I, II 保育社
 北村四郎・村田 源（1964年）『原色日本植物図鑑 草本編』上, 中, 下 保育社
 中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000年）『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会
 牧野富太郎（1990年）『改訂増補牧野新日本植物図鑑』 北隆館



1. 3. オニグルミの核 (×0.8) 2. 4. ブナ属の総苞 (×0.8)
 5. トチノキの果実 (×0.8) 6. トチノキの種子 (×0.67)
 7. ブドウ属の果実 (×3.75) 8. ブドウ属の種子 (×3.75)
 9. ヒョウタンの果皮 (×0.6) 10. イネ属の穎 (×2.5)
 11. エノコログサ属orヒエ属の穎 (×6.25)
 12. 不明種子 (×3.75) 13. 淡水産巻貝の殻口の蓋 (×1.875)

報 告 書 抄 録

| | | | | | | | | |
|---------|--------------------------------------|--------|-------|-------------------|--------------------|-----------|-------------|-------------------------|
| ふりがな | みとりかつこにいせき | | | | | | | |
| 書名 | 実取(2)遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | ～平成13年度市浦村特定環境保全公共下水道事業に伴う埋蔵文化財調査報告～ | | | | | | | |
| シリーズ名 | 市浦村埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第14集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 榑原 滋高, 長利 豪美 | | | | | | | |
| 編集機関 | 青森県市浦村教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒037-0401 青森県北津軽郡市浦村大字相内字岩井81-384 | | | | | | | |
| 発行機関 | 青森県市浦村教育委員会 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2002年3月25日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 (㎡) | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市浦村 | 遺跡 | | | | | |
| 実取(2)遺跡 | 青森県北津軽郡市浦村大字相内字実取423(市浦村相内浄化センター内) | 02385 | 38027 | 41度 02分 33秒 | 140度 21分 27秒 | 2001/6/26 | 10㎡ | 市浦村特定環境保全公共下水道事業に伴う緊急調査 |
| 所収遺跡 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 実取(2)遺跡 | 集落 | 平安時代後期 | 木組み井戸 | 擦文土器、箸、曲物、植物遺存体 | | 擦文土器を伴う井戸 | | |

市浦村埋蔵文化財調査報告書 第14集

実 取 (2) 遺 跡

～平成13年度市浦村特定環境保全公共下水道事業に伴う埋蔵文化財調査報告～

発行年月日 2002年3月25日

編集・発行 青森県市浦村教育委員会

〒037-0401

青森県北津軽郡市浦村大字相内字岩井81-384

TEL: 0173-62-3751

十三湊遺跡発掘調査事務所

TEL: 0173-62-3176

印 刷 東北印刷工業株式会社

〒030-0902

青森市合浦1丁目2-12